



貧困なんか恐くない

## 町全体を自由参加の家庭菜園にする

— 英国、ヨークシャー州、住民はゲリラ・ガーデナー



英国、ヨークシャー州の小さな町、トッドモーデンで、住民たちが世代を超え、種がたくさん詰まった袋を持って「武装」し始めたという一報が入った。真相を確かめに、同町を訪ねた。

### 「反乱」の第1歩は、バス停横のルバーブ



英国、ヨークシャー州はトッドモーデンで何やらおかしいことが起きている。野菜が町を侵食しつつあるのだ。仕掛けているのは、ゲリラガーデニングや家庭菜園でこの厳しい時代を生き抜こうとする地元住民たちだ。

始まりは、バス停の横に不釣り合いなルバーブがこっそり植えられたことだった。赤レンガの建物が建ち並ぶこの小さな町、トッドモーデンをやさしく吹き抜ける冷たい風にも抗うようにかすかに揺れるルバーブは、「反乱」の小さな、しかし大きな意味をもつ第一歩だった。

この小さな運動は、実はとても壮大だ。気候変動、持続可能な食料供給、地域社会の崩壊といった問題の解決に向け、その先陣を切るべくイギリス北部の小さな町がにわかに活気づいているのだから。

種をたくさん詰めた袋で「武装した」ウォーハーストと、彼女と考案を同じにする親友のメリー・クリアの2人が町中でゲリラ的な種まきを始めたのは、去年の春のこと。警察の目を盗んで交差点にこっそり果樹を植え、駐車場にジャガイモやニンジンの種をまき、駅の花壇

からは食用に適さないゼラニウムを抜いて代わりにハーブを植えた。



2人の願いは、お金がなく、袋いっぱいニンジンが必要としない老婦人やシングルマザー、お腹をすかせた子どもたちが、自分たちが植えた野菜や果物から必要なものを必要だけ収穫し、夕食の材料にしてくれることだった。

彼女たちの計画の真髄、そしてまちがいなく彼女たちのもっとも大きな挑戦は、オーガニック野菜、家庭料理、家庭菜園といった概念を「中流階級の『ガーディアン』誌の読者」の領地から、トッドモーデンの丘陵地に点在する公営住宅団地に移すことにあった。

クリアとウォーハーストは、1万5千の住民全員に、自分たちの食料は自分たちで育てるという考え方を植えつけ、オランダから空輸された精肉や長距離トラックで運ばれてきた卵を買うという市場原理に基づいた購買行動をやめさせることを目指している。

気候変動が世界の食料供給に与える損害からトッドモーデンを守ると同時に、2人は、人々の意識をファストフードから家庭料理に向けることによって、町が抱え、イ

ギリス全体に広がる肥満問題も解決できると信じている。

### 1万5千戸の公営住宅で、入居者全員に畑と種を提供

「こういう活動にどうやったら人々の賛同を得られると思う？」と、クリアは彼女たちが最初にぶつかった壁について話す。「気候変動とかトランジション・タウン(※)とか持続可能性とかについて論じてばかりではいけないってことに、気がついたの。それに、一部の限られた人たちの活動でもだめ。みんなが参加できるものでないと」

「植物を育てたり、料理をしたり、みんなで分け合ったり、楽しい時間を一緒に過ごしてみんなで泥まみれになることが大切。こうしなさい、ああしなさいと政府がピラを作っただアに差し込んだところで、人は動かないのよ」

地元紙に、「地元で農産物を育て、土地を共有することに興味のある人」を会合に誘う広告を出したところ、60人以上の人が集まったのは、2人にとつてはうれしすぎる驚きだった。トッドモーデンの町全体を自由参加の家庭菜園にするというアイデアは大きな喝采を浴びた。ほどなく、ウォーハーストとクリアの2人は、町の雰囲気は少しずつ変わろうとしていることに気づいた。「生真面目そのものの人たちが、私たちにこっそり耳打ちしてくれるの。『公会堂の裏にキャベツを植



えたの』とか、『教会の裏庭にラズベリーをこっそりまいておいたわ』とかね」と、ウォーハーストは笑う。

彼女たちの活動が地方紙で紹介されると、これをきっかけにあらゆる世代の住民たちが活動に参加するようになった。地元の小学校では野菜畑を作り、給食で必要な食材はすべて地元の農家から調達するようになった。老人ホームでは果樹園を整備し、病院は薬用ハーブ畑を作つて癒やしの空間とした。教会は墓地の一角を野菜畑に提供し、地元で消費される卵を100パーセント供給できるよう養鶏場計画もスタートした。さらに、急速に忘れられつつある家庭料理の基本を子どもたちに教えようと、パルプ・キッチンと名づけられた料理クラブも設立された。

これに共鳴するかのようになり、1万5千戸の公営住宅を有する「ペナインハウジング2000」は、いまだかつてない行動に出ることにした。入居者一人ひとりに野菜栽培のための土地と種を提供することを決めたのである。

5人の子どもをもつニコラ・ウィグツブ(40歳)は、この申し出を最初に受け入れた一人である。彼女は、トッドモーデンでもっとも治安が悪いとされるロングフィールド団地に住み、所得補助金と住宅手当を受けて暮らしている。世界中で食料価格が1.5倍に跳ね上がったこの1年、「生活はギリギリよ。買い物をするにしてもだいぶ

節約しなきゃならないし。だから、最近の特売品ばかり探しているわ」と話す。

今回、不動産会社から無償提供を受けた畑地で、彼女は同じ団地に住む人たちと家庭菜園をしようと考えている。「自分で育てれば安上がりだし、新鮮だし、どこで作られたかがはつきりしているし。ここにはポーランド人もたくさん住んでいて、彼らにも参加してもらいたいわ。あの人たちは料理も好きだから、ポーランド料理も味わってみたいじゃない?」

### 養鶏場コーディネーターなど、次に目指すは雇用の創出

トッドモーデンの人々を見事に家庭菜園に目覚めさせたウォーハーストとクリアが、次に目指すのは雇用の創出である。

「雇用が伴わなければ地元経済の持続的な発展は見込めないから」とウォーハーストは語る。これは、時間との闘いである。取材当日にも、郊外にある工場で54人の解雇が発表されたのだから。

ウォーハーストは、トッドモーデンの労働市場に新たに養鶏場コーディネーター、露天商、ピクルス・ジャム製造責任者を加えることを考えている。また、24時間監視が必要な水耕養殖場のために、75万ポンドの宝くじ助成金も申請中である。環境保全技術を導入することに、食用の魚を水槽



で養殖し、その栄養豊富な排泄物を肥料として苗床に循環させるのである。

「人々は、地域としてつながりのあった50年前の生活を見直すべきだということに気づき始めているわ」とウォーハーストは話す。「かといつて、その時代に戻るといふ話ではなくて、自分たちが食べるものは

自分たちで作れるということを示したいの」

「これは難しいことではないし、絵空事でもないわ。誰にでもできること。大切なのは、強い情熱をもつことよ」

⑧ Daisy Greenwell / The Big Issue

※石油時代終焉に備えた、循環型の町。英国を皮切りに世界に広がりつつある。